

高等学校英語科の新しい科目における授業の在り方  
～学力向上へ向けた4技能の統合的指導～

長崎県教育センター 高校教育研修課 松尾宏之

～目次～

- 1 はじめに
- 2 英語科指導の現状と課題
  - (1) 中学校英語科と高等学校英語科の指導の現状
  - (2) 高等学校英語科の課題
- 3 「コミュニケーション」科目の扱い
- 4 授業「コミュニケーション英語Ⅰ」のグランドデザイン【資料1、2】
- 5 実践事例【資料3-1、資料3-2、資料4】、アンケート結果【資料5】

1 はじめに

平成25年度から年次進行で実施される新学習指導要領において、高等学校英語科の改訂のポイントは次のとおりである。

- 科目構成を変更し、4技能の総合的な育成を図るコミュニケーション科目を創設する。
- 指導すべき語数を充実する。  
(中学校で学習する1,200語程度に、高等学校3年間で学習する1,800語程度を加え、合わせて3,000語程度とする。)
- 「コミュニケーション英語Ⅰ」を必修科目にし、すべての文法事項を本科目で取り扱う。
- 授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。

これらの改訂の背景には、中央教育審議会（以下、中教審）の英語教育に対する特定の課題認識があることを忘れてはならない。その課題の一つとして、「社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』の育成がより重要となっている。」「\*1」ということが挙げられている。つまり、実践的なコミュニケーション能力の育成という英語教育の持つべき目標が、今後の日本を取り巻く国際社会の中で、これまで以上に重要な位置付けになったということである。

中教審は、これまでの高等学校英語科の授業の在り方について、簡潔に反省を加え、「受信」のみならず「発信」を意識したコミュニケーション能力の育成を観点として、授業改善へと繋げる努力を強く求めている。同時に、平成23年度から小学校5年生、6年生で実施されている小学校外国語活動、平成24年度から全面実施となった中学校学習指導要領の改訂に連動・連携する形でも、高等学校の授業の在り方の見直しを求めており、高等学校の英語科教員の実践が期待される。

この調査・研究の目的は、そのような状況に対応するために、現在の高等学校英語科の課題を整理し、具体的な授業改善に資するグランドデザインを提示することにある。これを基に個々の授業展開を考えていただければ幸いである。このグランドデザインを作成するにあたり、県内の高等学校英語科主任の先生方（または、それに代わる英語科の先生）を対象に、アンケートに回答する形での協力をお願いした【資料5】。また、4技能のスキルアップを意識して指導を行っている学校現場の優れた実践事例【資料3-1、資料3-2、資料4】や、教育センターの研修講座等での取組なども参考

にしている。

## 2 英語科指導の現状と課題

### (1) 中学校英語科と高等学校英語科の指導の現状

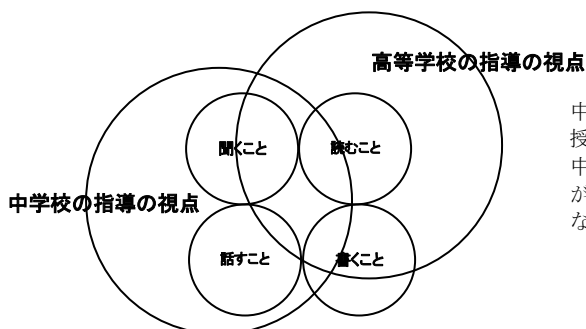
平成10年度告示の中学校学習指導要領（以下、旧中学校学習指導要領）に基づいた中学校の授業は、「聞くこと」「話すこと」という音声によるコミュニケーション能力の育成を重視して行われてきた\*<sup>2</sup>。実際の授業では、音声を伴う activity が活発に行われ、中学生の英語の音に対する慣れは以前より高くなってきたように感じられる。一方、高等学校で扱う語彙数や英文の量、質に関しては中学校から高等学校へのステップが少々高い印象がある。実際、中学校で扱う語彙、英文などを近隣諸国と比較するとかなり低いレベルであるという調査結果がある\*<sup>3</sup>。学習者として中高の差を乗り越えるためには、指導者側の中高連携を考えた計画的な指導と学習者側の高い意欲が必要となってくる。

このような状況を踏まえて、中学校英語と高等学校英語のそれぞれの指導の現状を見ると、両者間には指導上の異なる視点が存在する。それは中学校が音声を重視した指導を行っているにも関わらず、高等学校ではその連続性を保てぬまま、「読むこと」の指導に比重を傾け過ぎる傾向が多いということである（図1参照）。「読むこと」の授業展開そのものは問題ではないが、他の領域との繋がりがほとんどないことは大きな問題である。旧中学校学習指導要領や現高等学校学習指導要領では、中学校と高等学校を通じて、バランスの取れた4技能の指導を行うようになっているが、現実にはそのことが十分に図られてきたとは言い難い。

また、中学校での基本的な語彙や文構造を活用する力が十分には身に付いていないにも関わらず、高等学校において、さらに新たな語彙やより複雑な文構造の指導を、十分な活用がないまま進められてきたという状況がある。

このようなことが要因となって、生徒は英語の学習への意欲を低下させてきたのではないかとということが考えられる。中教審は、「英語が大切、普段の生活や社会に出て役に立つと考えている生徒は、他の教科に比べて多いのに対して、学年が進むにつれて英語が好きな生徒は減少する傾向が見られる」\*<sup>1</sup>とも指摘している。

高等学校の英語科教員へのアンケート結果【資料5】を見ると、問11において、80.3%が「4技能の中で、最も多くの時間をかけて指導しているのは reading である」としている。一方、問12では、「4技能の中で、最も指導に困難さを伴うものは」、多い順に speaking 43.9%、writing 36.4%、reading 10.6%、listening 6.1%であった。つまり speaking と writing の指導の困難さを合わせると 80.3%となる。このことから推測されることは、高等学校では、「読むこと」の指導に時間を取られてしまい、中学校時代に活発に行われてきた「話すこと」の指導は、十分な時間を見出せず、うまく継続されていない。また、「書くこと」の指導も、「基礎的な文法力や語彙力の不足」という理由から、それらの「基礎」の定着に時間を費やし、結果として、いわゆる「発信」することを意識した speaking や writing の指導にまで至っていないことが推測される。



中学校は「聞くこと」「話すこと」の活動が活発に行われ、それらが授業の中心に置かれている。一方で、高等学校では「読むこと」を中心に授業が組み立てられている。中学校から高等学校への橋渡しが十分になされなければ、生徒にとっては積み重ねの学習が困難になる可能性がある。

図1 中学校と高等学校の指導の異なる視点のイメージ

## (2) 高等学校英語科の課題

次に、高等学校英語科に特有の課題を見ていくことにする。

高等学校の現学習指導要領でも、「4技能を総合的に指導し、統合的に活用する」授業展開が期待されてはきたが、「読むこと」に偏った授業形態が多く存在し、思うような改善が見られなかった。そのため、新学習指導要領においてはかなり強調した形<sup>4</sup>で、同じことが謳われることになった。なぜ、目標とすべき「4技能」のバランス良い授業展開が成されてこなかったのか、再度アンケート結果に示された英語科教員の意識を考えてみたい。

アンケート結果の問19「今後、新学習指導要領が求める授業改善（「英語の授業は英語で行う」ことを除く）をしていく上で、支障となることがありますか。あれば、それはどのようなことですか。」の「支障になる」理由として挙げられたものの中から主なものとして、次のような回答があった。

- 英語科教員の共通理解を求めにくい。
- 日常的に使っていない言語において、文法などの知識なしで高いレベルまで引き上げることはできないと考える。
- 生徒の基礎力不足。
- 求められていることと大学入試の二次試験までを踏まえた最終的な受験指導の内容とが直接結びつき難い。新学習指導要領が求めるとおりの授業を実践できたとしても、限られた授業時数と年数で大学入試に対応できる力を養成できるのか心配である。

授業改善に「支障がある」(38.5%)との回答率は、「支障は特にない」(61.5%)との回答率より低い。が、「支障がある」場合の理由として挙げられたものは、現在の高等学校の英語指導上で必ず論議的になる課題である。まず一つ目の、「英語科教員の共通理解を求めにくい」とはどういうことかを推測すると、例えば、教科会等で授業の在り方について論議し合うことはあっても、個々の授業の在り方に立ち入って協同で授業づくりを行うという実践的な取組にまではほとんど至らない。結果として、授業の在り方の根底の部分で、今一つ足並みが揃わず、共通理解も得られにくいと思われる。最近、互いの授業を参観し、授業研究に繋げて熱心な論議をする学校も多くなってきたが、実質的な授業改善に至る研究を行っている学校はそれほど多くはなく、教員個々の取組が待たれているだけである。また、そもそも時間的な余裕がなく、共通理解を図る場面が十分でないことも考えられる。

二つ目と三つ目に挙げられている「文法などの知識」と「生徒の基礎力不足」という問題は、日常的に英語を使用する機会が極端に少ないので、語彙力や文法の知識、あるいは文構造の把握などの十分な基礎固めを行っていないければ、高いレベルのコミュニケーション活動はできないとの趣旨であろう。四つ目に挙げられている「大学入試への対応」という課題は、常に英語科教員を悩ませる問題である。

問題を整理すれば、第一に、高等学校1年生の基礎段階での指導が、中学校までに受けた指導から少々乖離しているということが、指導者側にそれほど意識されていない。英語を日常的に使用しない環境であるからこそ、試行錯誤しながら英語の使用に慣れることを、基礎固めの段階から意図的に行うことが重要なのであり、英語力のそれぞれのレベルに応じた英語の使用を積極的に行うべきである。

第二に、コミュニケーション能力の育成と大学入試への対応が異なる次元で捉えられている。従って、大学入試が最終目標になってしまい、英語というコミュニケーションの道具を用いて何か事を成すための訓練ではなくなっている。つまり英語習得の本来の目標やそのための指導の全体像を描くことを忘れてしまっている感が否めない。

端的に言えば、本来の目標と現状とをどのように結びつけるのかという英語指導上の戦略が不足しているのである。

3 「コミュニケーション」科目の扱い

今回の学習指導要領の改訂で、「コミュニケーション」を冠した科目が新設された（図2参照）。この「コミュニケーション」科目は総合的な英語であり、4技能を別々に指導するような編成にはなっていない。この科目を通じて、「4技能の総合的指導、統合的活用」を図るような授業展開を行うことになる。この中でコアとなる科目は、必履修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」であり、これを授業でどのように扱うかが最大の関心事となる。また、中学校英語との接続を強く意識した「コミュニケーション英語基礎」が設けられ、基礎の定着を十分に図った後に、「コミュニケーション英語Ⅰ」へ繋ぐようになっている。また「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書の多くが、中学校英語の基礎の定着を意識した編集になっており、中教審の指摘する「中学校からの連動した指導が十分ではない」という課題<sup>\*1</sup>への対応を反映している。

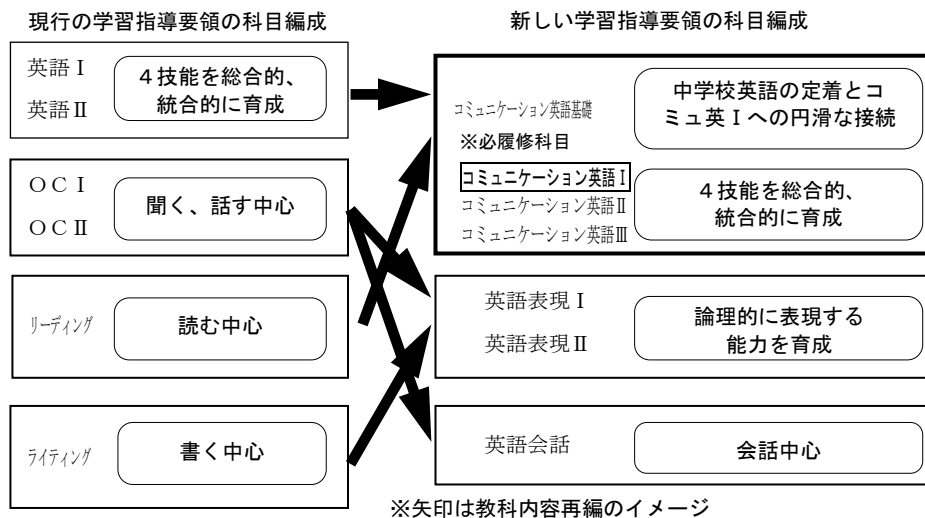


図2 教科内容再編 (文部科学省ホームページより作成)

さて、「コミュニケーション英語Ⅰ」ではどのような授業展開を行うべきであろうか。現行の「英語Ⅰ」において、文法・訳読が中心となっている傾向があるとの指摘を払拭できるのであろうか。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書を見ると、現行の「英語Ⅰ」の教科書と質的にそれほど差はないようである。但し、中学校英語を繰り返して復習させる手立てがあったり、様々な形態のコミュニケーション活動のためのタスクが多少充実したりしていることはあるが、そうかといって、教科書自体に授業改善を促すような大胆な仕掛けがあるわけではない。文法・訳読にのみに終始する授業を避けるためには、綿密に練られ、計画的にコミュニケーション活動を配した授業展開を行うことが英語科教員に求められる。

英語の場合、教科書は様々な教材のうちの一つであるという認識が良いと思われる。というのは、様々なレベルのコミュニケーション活動には、教科書の内容を越えたところで成立する場面が多々存在するので、教科書の内容を深く掘り下げたり、関連ある教材を持ち込んだりするなど多方面の準備が必要となってくるからである。教科書を中心として、それに他の教材を関連させた上で、4技能をどこで、どのように有機的に繋げて指導するかを俯瞰するように授業設計を行う方が良い。そうすることで、学習者の立場で学習の連続性や効果的な言語材料の活用、そして4技能のスキルアップへ繋がるのが望めるからである。

## 4 授業「コミュニケーション英語Ⅰ」のグランドデザイン【資料1】

※文中の○数字はグランドデザイン【資料1】の○数字を指す。

本グランドデザインは、「コミュニケーション英語Ⅰ」で授業を行う際、その全体構想の基本となる授業構成の考え方を提示したものである。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の①「目標」を軸に、②「授業」と③「評価」を配して、1単元（1 lesson）の授業計画に使用できるものとして作成した。また、「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書が、本文を読む前の意欲を喚起する活動、本文を読む活動、本文の理解の深化を図る発展的な活動の三段階の読みを可能にする編集になっているものが多いことから、授業の流れの大枠を Pre-reading、While-reading、Post-reading という三段階構成の展開にした。最も重要なことは、目標を基に、授業の全体像を俯瞰するように捉えることである。そうすることで、効率的で、バランスの良い指導計画を立てることができるであろうし、また、授業後も、指導の全体を振り返り、評価・検証を行うことが可能である。

「目標」は、生徒の状況を教師が常に意識するような目標を立てられなければならない。特に本グランドデザインでは、Can-do リスト<sup>\*5</sup>を組み込んだ。これは、生徒が授業を経験することで、自己の現状から「何をできるようにならなければならないか」を意識して学習できるようにするためである。

「授業」では、三段階のそれぞれに応じた段階的な「発問」（発問の例【資料2】）を行いながら、教師 - 生徒間、生徒 - 生徒間の Interaction の場面を多く設定している。これは、授業の中で、語彙・文法・言語材料等々を頻繁に活用させることで、コミュニケーションの訓練を行うためである。また、三段階の授業の流れの最後に、各 Lesson に応じたまとめや問題解決型の task などを組み込んだ。このことによって、習得した英語の知識を深化・発展させる機会を設定するためであり、「英語を使える」実感を味わわせることによって、コミュニケーションへの意欲を高めることも想定した。

「評価」については、4観点を踏まえて、それぞれの段階に無理なく配置することがポイントである。各指導に対して、生徒の状況を多角的に観察し、次の指導に活かすことが最大の目的である。

グランドデザインの基本的な考え方を、次の6つにまとめた。

1. 全体構想から各 Lesson の授業を創造する。  
各授業の流れを有機的に繋ぐことによって、学習者の立場での授業構成を行うため。
2. 1単元（1 Lesson）全体を俯瞰して授業を構成する。  
4技能のバランスのとれた効果的指導を維持するため。
3. Pre-reading、While-reading、Post-reading の3段階で読む。  
多角的アプローチやスモールステップで、理解の深化を図るため。
4. 発問を軸とした授業の流れを作る。  
Interaction を通して、4技能のスキルアップを図るため。
5. 各 Lesson に応じた「まとめの task」や「問題解決型の task」などを組込む。  
Task を設けることで、英語を実践的に活用する場面を設定するため。
6. 授業後も指導を俯瞰し、評価・検証を行い、次のステップへ繋げる。  
フィードバックから更なる効果的な指導の在り方を検討するため。

## 5 実践事例【資料3-1、資料3-2、資料4】、アンケート結果【資料5】

【資料3-1】と【資料3-2】は、当教育センターの平成22年度高校教科指導リーダー育成研修講座受講の佐世保北高校、相原勝斗志教諭による「英語Ⅰ」の授業における While-reading 活動で、ワークシート【資料3-1】の③Questions を使った教師 - 生徒間 Interaction を文字に起こしたものであ

る【資料3-2】。

実践授業は、高等学校1年生の5月に行われた高等学校初期の授業である。どちらかという教師の発問に支えられた生徒とのやり取りであるが、生徒の発言を促すために教師のパラフレイズした発問が工夫されている。しばらくはこのような状態が続く授業展開であると思われるが、教師が耐えることも必要である。

【資料4】は、平成23年度「同研修講座」受講の長崎北陽台高校、黒川智通教諭の Out-put 活動 (Post-reading) の実践記録である。

Out-put 活動には様々な活動がある。生徒が英語を使用する場面の総仕上げとして大変重要な活動であると考えられる。この活動を通じて、教材理解の深化や生徒のこれまでの様々な知識や興味が新たな知識や興味に結び付けられ、生徒の英語力の形成に資するものと考えられる。

【資料5】は、県内56校、66課程の学校現場にアンケートした結果（回収率は95.5%）である。

\*<sup>1</sup> 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」から抜粋

\*<sup>2</sup> 平成10年度中学校学習指導要領外国語の目標には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」とある。

\*<sup>3</sup> 現在、わが国の中学校の英語の教科書は、近隣諸国と比較してみると、英語の量の少なさに加え、「話し言葉」が多用されているという状況が窺える。また、中学校3年間で扱う語彙数（旧課程）は、アジア諸国（中国、韓国、台湾）の小学校終了時までには扱うレベルであると言われている。

「アジア各国と日本の英語教科書比較」教育再生会会議資料 2008.5.16 投野由紀夫 東京外国語大学 基盤研究

\*<sup>4</sup> 高等学校学習指導要領解説外国語編 改善の趣旨（平成22年5月）

\*<sup>5</sup> Kagoshima Standard of Reference (KSTR Ver.20090110)の Step 5

（英語を実践的に使い始めるレベル：高校1年生レベル）：Can-do statement 鹿児島版(鹿児島高英研)

様々な Can-do リストが、様々な団体等から出されている中で、鹿児島高英研の Can-do リストは学校現場での扱いに適していると思われる。

#### 参考文献または URL

- ・高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 H22.5 文部科学省
- ・平成10年度中学校学習指導要領外国語
- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」  
中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
- ・「アジア各国と日本の英語教科書比較」教育再生会会議資料 2008.5.16 投野由紀夫 東京外国語大学 基盤研究  
[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku\\_kondan/kaisai/dai3/2seku/2s-siryou3.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku_kondan/kaisai/dai3/2seku/2s-siryou3.pdf)
- ・「英語で英語を読む授業」卯城祐司編著 研究社出版
- ・「アウトプット重視の英語授業」伊東治己編著 教育出版
- ・「授業活動とその分析」大喜多喜夫著 昭和堂出版
- ・「コミュニケーションのための4技能の指導」伊東治己編著 教育出版
- ・「中学校英語授業 指導と評価の実際」杉本義美著 大修館書店
- ・「英語リーディング指導ハンドブック」門田修平・野呂忠司・氏木道人編著 大修館書店
- ・「より良い英語授業を目指して 教師の疑問と悩みにこたえる」斎藤栄二・鈴木寿一編著 大修館書店
- ・英語教育学大系 10巻 リーディングとライティングの理論と実践 大修館書店

- ・英語教育 2009.5月号 特集「新学習指導要領～英語教育は変わるか～」大修館書店
- ・英語教育 2010.4月号 特集「『発問』で授業が変わる！」大修館書店
- ・英語教育 2011.1月号 特集「日本を支える英語教育とは」大修館書店
- ・英語教育 2011.7月号 特集「4技能統合におけるスピーキングの指導」大修館書店
- ・英語教育 2011.9月号「小中高大の連携のあり方」岡田伸夫 大阪大学教授 大修館書店
- ・英語教育 2012.10月増刊号 <特別記事>CAN-DO リストで「できる」こと 大修館書店
- ・英語教育 2013.2月号「文法と語彙指導」横川博一 神戸大学教授 大修館書店